

# 島嶼学概論 I (三島村硫黄島講義) 実習レポート

鹿児島大学 教育学研究科 修士課程 2年

土元 哲平

## 写真でみることと、体験すること

目的地である硫黄島へ近づくにつれ、私はフェリーの甲板からの自然の迫力に圧倒されていた。硫黄岳の山腹からは硫黄が見えており、そこから噴出する火山ガスが山頂付近を分厚く覆っている。私は、まさに「活火山」だ、と感じた。驚きも束の間、フェリーが港へと入っていくと、そこには一面の黄色い海が広がっていた。同時に視界に入る、鬼界カルデラ名残の切立った岸壁。そして、数名の島民による歓迎のジャンベの演奏が近づいてくる。私は、何もかもに圧倒されていた。



私は出発前にいくつかの Web サイトを通して、硫黄島についての知識を得ていた。たとえば、硫黄島は、島の東側に大きな火山があることや、海の色が黄色いということである。さらに、フェリーが到着するまでの間、船内ではガイドの大岩根博士による丁寧な解説によって、硫黄島とはどんな様子なのか、事前に知識を得ることができた。

しかし、島に入ってまず感じたのは、「写真と実物ではまったく違う」ということである。海に関していえば、それは確かに「黄色い海」なのだが、私が感じたのは「黄色い」ということだけではない。いわばオレンジジュースの中を船で渡っているようである。そんな体験をかつてしたことがあるだろうか。まるでファンタジーの世界にいるような、言葉に表せない違和感を味わっていた。

## 硫黄島の環境と人々の生活

硫黄岳の影響によって島には酸性雨が降るといふ。島のあちこちのガードレールが錆び付いていることが、それを物語っている。また、酸性土壌であることから、大規模に農作物を育てることは困難である。こうした中で、島の人々はどのように生活を営んでいるのだろうか。



島で暮らすある女性は、生活に必要な食材は、県本土のスーパーからインターネットで取り寄せているという。肉は冷凍して送ることができるし、傷みにくい果物や野菜は島でも食べることができるが、葉物野菜は長時間の航海により腐ってしまう。そのため、同じような食材に偏ってしまうと話していた。

## 島嶼学概論 I (三島村硫黄島講義) 実習レポート

鹿児島大学 教育学研究科 修士課程 2年

土元 哲平

### ごみ捨て場に見る世界の縮図

島の一角がごみ捨て場になっていた。古くから硫黄島に住む人はここにごみを捨てていくという。竹や刈り取った草だけでなく、自転車やプラスチック製品などの廃棄物も見られた。

硫黄島は島全体の面積も小さく、大型の廃棄施設を作ることは難しい。そうすれば、生活の場から少しでも離れた場所へ集めるしかない。近い将来、島がモノで満ち溢れるようになれば、その時に出る廃棄物はどこへ行くのだろうか。

高宮教授は「島は世界の縮図」と仰っていたが、「島」というミクロな視点から「世界」というマクロな視点へと捉え直すことも時には必要であろう。ごみ問題の本質的な課題は「廃棄」ではなく「生産」の方にあるのかもしれない。



### ジャンベを通じた音楽的な関わり

私たちは、硫黄島に伝わるジャンベという楽器のワークショップを受けることができた。講師の先生が言うには、ジャンベのよい点は、下手な人でも、簡単なリズムを叩けばプロともセッションできるということである。私はまさに言われた通り、初めて1日でもプロの奏者の方々と一緒に音楽を奏でることができた。このように、楽しむことに専念して演奏できることはジャンベの魅力の一つだと感じた。



### 教科横断的な学習の場として

学校教育として硫黄島での実習を行うとすれば、教科の枠にとらわれない、横断的な学習が可能となるだろう。まず、島の豊かな自然は、地学的に貴重な教材となることは言うまでもない。島のゴミ処理の事情や、スーパーマーケットなどがない現状を知ること、島での生活環境を学ぶことができる。酸性雨や酸性土壌を知れば、子どもたちは酸とアルカリについて考えるだろう。クジャクが野生化した現状をみて、生態系について考えを巡らすかもしれない。そして、ジャンベを通して、人との音楽的な関わりだけでなく、硫黄島・そして西アフリカの文化にも接している。このように、ひとつの地域を自然環境、歴史的背景、産業、環境問題、生活・文化といった視点から結び付けて理解する上で、「島」というのは大変よい素材となる。

たとえば、地理教育の分野では、従来の「窓方式」の教え方による「暗記科

## 島嶼学概論 I (三島村硫黄島講義) 実習レポート

鹿児島大学 教育学研究科 修士課程 2年

土元 哲平

目」化が危惧されている。それと補完的な学び方として、ひとつの地域を様々な視点から見ることも重要である。硫黄島は小さな島ながらも、私たちが生活している地球（ジオ）という視点から幅広い学びを創出する可能性を持っているのである。

また、理科教育においても、同様に「暗記科目」化をいかに防ぐかという点で様々な工夫が試みられている。都市部の子どもたちは農村部の子どもたちに比べて自然を体験する機会が少ないことはしばしばあり、例えば地学に関していえば、いかに写真や動画を用いて地形や地層の説明をしても、実際に「本物」を見たことがあるかどうかによって子供たちの学習意欲は大きく影響される。実際に露頭を見たり、石や土を触ったり、自然の温泉に入ってこそ感じられることがあるだろう。

学校での学びは本来、子どもたちの生活に根付いてこそ意味あるものになるということを考えれば、豊かな自然体験の機会を用意することは学校教育の重要な責務である。

このように、体験活動の魅力と役割について考察してきたが、実際に学校教育としてこうした活動を行う際にはいくつかの課題がある。既に宿泊学習を通して実習を行っている学校もあるというが、ここでは、学校教育として教科横断的に硫黄島での体験実習を行う際の課題を検討してみたい。

まず、硫黄島での引率・解説者の養成が求められる。専門的知識だけでなく、島の生活への理解も重要な点であるため、ここが最も大きな課題ともいえよう。これについては、1人に専門的な解説と島の文化的な説明の両方を任せるのではなく、島民と教諭が協働的に連携して行われるべきである。そのための定期的な研修制度や、引継ぎのための制度まで、組織的に行っていくことが求められる。さらに、これに伴う教員の負担感をいかに軽減していくかという点も同時に考えていかねばならない。

次に、日程的な課題であるが、硫黄島までのフェリーは時期によっては週に3便しか出ておらず、いかに学校行事の日程として確保するかが問題である。潮の高さによっては欠航となる場合もあるし、気象によっても島内の観光可能な場所が左右される。学校側は、日程については弾力的に対応ができるよう留意すべきである。

最後に、受け入れ人数の課題である。これは、多くて30人程度であろう。宿泊施設としての限界もあるが、島の各地を周るための、移動手段やスケジュール上の制約もある。さらに、人数が多くなればそれだけ廃棄物も増え、島のゴミ処理の能力を超えてしまう。大規模校では希望者を募って実習を行うことが限界であるかもしれない。

### おわりに：硫黄島での体験を通して

文部科学省(2013)<sup>1</sup>は、体験活動は、仲間とのコミュニケーションや自分自身との対話、実社会とのかかわり等を考える契機となり、それが他者への共感や日本人としての心の成長、個人や社会の歴史の形成につながっていくと述べている。そして、青年期におけるそのような人間的な基盤づくりの重要性を指摘している。

自然体験もそのような体験活動の一つである。五感を働かせて得た体験は、単に既習事項を復習する場ではなく、自己理解・他者理解へも繋がっていく可能性を持っているのである。授業におけるICT活用が進む昨今では、教師はビデオや3D映像を活用する機会も増えてきた。しかし、ともすればフィールドワークが軽視され、授業は教室の中だけで完結してしまうこともあろう。私たちが生活しているのは「いま、ここ」という現実の場なのであり、子どもたちの生活に根ざした学びのためには、体を動かしてはじめて得られる生の体験こそが重要である。それが子どもたちの心を豊かにする土壌ともなるのではないだろうか。

---

<sup>1</sup>文部科学省(2013)「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1330230.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1330230.htm) よりダウンロード) (2016/7/8 閲覧)